

日本への二つの「挨拶」

——『セルパン』ジャン・コクトー来日特集号をめぐって（1）

西川正也

昭和 11 年（1936）春、フランスの詩人ジャン・コクトー（1889－1963）はパリの新聞社の企画した「八十日間世界一周」旅行の途中で日本を訪問した。5月16日、神戸の港に降り立ったコクトーは京都を訪れた後、夜行列車に乗り込んで東へと向かった。

翌朝、横浜駅で列車を降りた詩人は近くのホテルで短い休息を取ったが、それ以降のコクトーの行動については「都新聞」（現「東京新聞」）が次のように報じている。

フランス文壇の鬼才ジャン・コクトー氏は十八日朝飄然横浜のホテル・ニューグランドに入り小憩の後、午後三時ごろ自動車で上京、堀口大學氏はじめフランス文学者多数に取囲まれて青葉の帝都風景を満喫した、（中略）直に明治神宮に参拝し、一旦帝国ホテルに落付いたが、^{やが}廳て窓外に迫る帝都の黄昏の美しさに誘はれ、六時半山王下のお座敷天ぷら「富貴」で憧れの日本の味を舌にのせた 1)

この夜「富貴」で開かれたのは、前年末に結成されたばかりの日本ペンクラブが急遽企画した、コクトー歓迎の宴であった。コクトーとその秘書マルセル・キル（1912－40）をもてなすべく宴席に加わったのは、案内役の堀口大學（1892－1981）、劇作家の岸田國士（1890－1954）のほか次のような面々であった。

柳澤健氏、有島生馬氏、小松清氏、勝本清一郎氏、芹澤光治良氏、菱川修三氏等も続々来会仏蘭西語の懐しい連中ばかりの事とて日本語のない宴が張られた、コクトー氏は大の日本好き、箸の捌き工合も器用に天ぷらを喰べながら

これは大好物です、航海中は印度洋上の暑い航海の折りでも汗を流し乍ら喰ひました、こゝの料理人の眼玉の大きいのが面白いですね
と飛んだところへ御愛嬌を振りまいて大満悦 2)

上に名前を挙げられた参加者の中で有島生馬（1882－1974）、勝本清一郎（1899－1967）、芹澤光治良（1897－1993）はペンクラブの役員、柳澤健（1889－1953）は外務省の代表、小松清（1900－62）は滞仏経験の長い文芸評論家であった。菱川修三（1909－67。「菱川」は誤り）は堀口が目をかけていた若い詩人であるが、上の記事と同じ「都新聞」に5月20

日から三日続けて「コクトオとの一夜」と題する会見記事を掲載しているから、あるいは新聞社に依頼されての出席であったのかもしれない。

この夜の歓迎会の詳細についてはその菱山や芹澤が残した文章を引いて前に紹介したことがあるが、慌ただしく宴を終えたコクトーの一行は急かされるようにして迎えるの車に乗り込むと、そのまま歌舞伎座に向かうことになったのだった。



〔図版1〕「富貴」における歓迎会
前列右より岸田、堀口、コクトー、柳澤ら

1 「日本への挨拶」

七時半自動車を駆つて歌舞伎座へ……恰度舞台では菊五郎の鏡獅子が始まつてみて絢爛たる歌舞伎の世界に恍惚と眼を奪はれて

歌舞伎は超自然的な美しさです

菊五郎は偉大なる芸術家だ

と激賞してみた 3)

この「都新聞」の記事では、その夜に観た歌舞伎に対するコクトーの称賛の言葉が短く紹介されているにすぎない。しかし「鏡獅子」とその演者・六代目菊五郎（1885－1949）に対してコクトーが放った讃辞が心からのものであったことは疑いようがない。自身の旅行記に「長くはあるが冗長でないこの舞踏は、私たちの旅に値するものであった。それを見るためだけにでも私は旅を企てたであろう」4)と書き記したコクトーは、観劇の二日後に出演したラジオ番組でも特に歌舞伎を取り上げて、その魅力を語ったのである。

詩人ジャン・コクトオ氏が、マイクロフォンを通して日本に呼びかける最初の、そして最後の「肉声」、予期せぬそれが、今夜はからずもAKのマイクを通し聞かれる事になりました、題して「歌舞伎の印象」これは一昨夜見たばかりの日本のカブキの印象を一流の異色ある観察と詩情と機智に満ちた即興詩として朗読しようといふのです、コクトオ氏は日本に来る前から「キクゴロウ」の名前を知つてみて、とても楽しみにしてゐた上に、舞台上「春興鏡獅子」を見たときはうつとりと吾を忘れてゐた位ですから、どんなに素晴らしい抒情の展開があるか、全くこれは聴きものでせう 5)

上の文章は放送当日にあたる5月20日朝刊のラジオ番組欄における紹介記事の一部である。この番組はわずか十分間の放送であったが、それにもかかわらず各紙ともに写真付きの囲み記事の形で大きな紙面を割いている。ただし文中には「即興詩」の朗読を行なうとあるが、案内役としてコクトーに付き添った堀口によれば、朗読用の原稿は放送の前日までにすでに書きあげられたものであったという。

ところで、これまで不明な部分も多かったこの放送の内容に関しては、コクトー来日の翌月に発行された雑誌『

セルパン』七月号にその邦訳原稿が採録されていることが判明した。昭和6年に創刊された『セルパン』は当初は文芸色の濃い雑誌であったが、三代目の編集長として昭和10年に詩人の春山^{ゆきお}行夫(1902-94)が招かれてからは、政治や文化、海外事情等の話題を幅広く取り上げる総合誌として広範な読者を獲得するに至った。春山については別の機会に詳しく論ずることになるが、コクトー詩に深い関心を寄せ、詩人の来日時には自ら対面にも赴いた春山の意向によって『セルパン』の「コクトー日本訪問」特集が組まれたことは間違いない。またこの号にも原稿を寄せている堀口大學が、同誌の出版元である第一書房の社主・長谷川巳之吉(1893-1973)と親しい間柄にあったこともこの特集と無関係ではないだろう。6)

コクトーのラジオ番組に話を戻せば、その内容が広く公開されたのは、当日の放送をのぞけば昭和11年の『セルパン』七月号と、平成10年に発行されたその復刻版においてのみである。フランス版はもちろん日本版の『コクトー全集』等にもこの放送原稿は収録されていないため、やや長くなるが堀口大學による邦訳の全文をここに掲載しておきたい。

日本への挨拶

ジャン・コクトー

皆さま方

残念なことに、私は、あまりにも^{〔あわただ〕}遽しく日本を通り過ぎなければなりません、と申しますのは、私が八十日間で世界を一周することに成功しようとして、旅行中だからであります。この旅行のもととは云へば、あの有名なジュール・ヴェルヌの小説であります。今を去る事六十年の昔、あの小説が書かれた当時にあつては、八十日で世界を一周することは、一つの夢物語に過ぎなかつたのですが、それが、一九三六年の今日では、



〔図版2〕ラジオ番組の紹介記事

この夢物語が可能になつたのであります。「可能」と申しても、僅かに可能なのであります。飛行機を用ひない限り、東から西へ向つて進む旅行者が、毎日四分間づつ太陽を追ひ越さないことには、成就しがたいのであります。私は友人のマルセル・キル君を伴つて、この旅行を続けて居りますが、いはば、彼が弥次郎兵衛パツスバルトオであつて、私が喜多人フレアス・フオツグと云つたやうな次第です。

フランスにゐて、私が日本に就いて考へてゐたことは誤解でした。私は日本といふ国を、僅かに浮世絵や屏風によつて空想してゐたのでした。私は日本と云ふと、ただもう、花の咲いた美しい枝に止つた小鳥達や、竹林からをどり出して来る虎や、牡丹に戯れる獅子の姿を想像するのでした。

今度見て、私は自分の想像してゐた日本が如何に外面的であつたかといふことに気づきました。明日、私は、日本の厳肅な、そしてまた宗教的な姿を心の土産にしてお国を去らうとして居ります。

上御一人の爲めに、尊い一命を快く犠牲にし得るあの生命の抛棄——自殺——あれが日本の国運と日本人の微笑の根本になつてゐると私には思はれます。一昨夜、私は歌舞伎座で「鏡獅子」を見物いたしました。あなた方の名優菊五郎、あれは俳優ではなく、むしろ舞台の上の神主であります。彼は神主であり、また動く背景であります。出囃しの音楽と、彼の典麗な所作とが一緒になつて、一種神神しい神の前の礼拝の気持をつくり出します。然しこの礼拝の気持は、西欧諸国で神秘劇と呼ばれてゐるあの宗教劇とは、似もつかないものなのであります。菊五郎が見せてくれるものは、実に舞台の上の宗教だと、私は申し上げたいのであります。

あの純白な、素晴らしい獅子の鬘かつら、菊五郎はあれで、あの舞踊の無言の歌詞を書いてゐるやうに私には思はれます、あの大きな毛筆で。

菊五郎が見せてくれる、お腰元の扇の踊り、長いけれど少しも退屈の感じられないあの踊り、あれを私は一生忘れることができないだらうと思ひます。あの踊りは、国技館で昨日見物した相撲と共に、私にとっては真の日本の力、美しさと剛気さとを打つて一丸となした力を見せてくれるやうな気がします。

踊る菊五郎が、一瞬間立ち止る時の、また仕切り最中の両力士が互いに相手の胸中を鼻突き合せて研究しあふ時の、あの二種類の厳肅な気持ちが、私に思ひ出させるのでした、明治神宮の境内のあの超人間的な静けさと、そこへ参拝に来る人々の敬虔な姿とを。

皆様方、私の爲めに無駄な時間を過ごして戴くのではないかと惧れますので、私は、このあたりで、講演を終らうと思ひますが、それに先立つて、かくまで私を歓迎して下さいつたお国の皆さま方、ことに私に対して熱烈な関心を示して下さいつた若き世代の方々に、深甚な感謝の意を捧げ度いと思ひます。

尚、J・O・A・Kの希望で、自作の詩を一篇朗読することにいたします。今度世界一周の旅に出るまでに、自分が知つてゐる限りの各国の市々まちを歌つたものですが、これによつて、私がいまだに多くの市をこれまで知つてはゐなかつたことが、お解りいただけ

ることと思ひます。

僕はあんまり旅行はしない

僕はあんまり旅行はしない。

僕は見た、倫敦を、ヴェニス^を、ブリュツセル^を、羅馬^を、アルヂエ^を。
博物館からお寺へと駆けめぐつて、
旅を希ふ心の焰を消しながら。

ロンドン^は石炭の心臓の市^{まち}、赤煉瓦の虞美人草の花の市^{まち}、
居眠りしながら人たちが歩いてみた。

ヴェニスは寂しい市^{まち}だつた、
昔の恋の面影が、今半分もないために。

ブリュツセル、あの広場、

あれは素敵な劇場だ。

羅馬は石膏像のあの不人情な目をしてた。

アルヂエの市^{まち}は、牝山羊とジャスマンの匂ひがした。

自分の好きなこれらの市^{まち}々で、僕は幸せでなかつたのだ。

僕の心臓はむき出しで悩みつづけた。

巴里にゐてもおんな^{おんな}じだ。

何処にゐても僕は楽しまない、お前と一緒にゐなくては。

(堀口大學訳) 7)

先述したとおり、コクトーは番組用の朗読原稿をすでに放送前日に書きあげていた。したがってここに引いた堀口による邦訳も当日のコクトーの言葉をその場で訳したものではなく、詩人から渡された原稿に基づいて、あらかじめ用意されたものであったと考えてよいだろう。

ところで上の文章は内容にしたがっていくつかの部分に分けることができるが、最初の段落（「残念なことに…次第です」）は、コクトーが日本を訪れることになった経緯を聴取者に向けて説明したものであり、目新しい要素を含むものではない。

また二番目の段落（「フランスに…想像するのです」）では日本に対する来日以前の印象が語られているが、そうした見方が「外面的」なものでしかなかったことは、詩人自らそれが「誤解」であったと認めるとおりである。

一方、第三段落から第四段落の前半にかけての部分（「今度来て見て…私には思はれま

す)には、実際に日本を歩いたコクトーが旅行記の中で後に展開することになる「日本観」の、原点とも呼ぶべき記述を見て取ることができる。すなわちコクトーにとっての日本とは「厳粛」で「宗教的」な国であり、天皇のための「生命の放棄＝自殺」こそがこの国の基盤になっているというのである。

そして、そうしたコクトーの視線はまた「歌舞伎」の上にも注がれることになる。第四段落の後半から第七段落まで（「一昨夜、私は…敬虔な姿とを」）の間でコクトーが述べているのは、菊五郎が「舞台の上の神主」（フランス語では *prêtre*＝司祭）であり、彼の演ずる「鏡獅子」は「舞台の上の宗教」にほかならないという見解である。彼の踊りは「真の日本の力」を伝えるものであり、その一瞬の静止が喚起する「厳粛な」気持ちは、相撲の仕切りと同様に、明治神宮の静寂に通ずるものであるとコクトーは続けている。

ラジオで発せられたこうした言葉の多くは後に発表される旅行記の中でもそのままの形で、あるいは表現を変えて繰り返されることになるものであった。しかしまたこの放送原稿の中には、それらのページには含まれなかった記述も散見される。例えば、菊五郎の所作は音楽とあいまって「神神しい神の前の気持をつくり出す」ものであり、それゆえに「鏡獅子」は「舞台の上の宗教」と呼ぶべきであるというコクトーの主張は、旅行記における練り上げられた表現よりも、むしろ直截的に詩人の真意を説明してくれるものと言えるだろう。

ところで、第三段落で語られた「天皇のための生命の放棄＝自殺」が日本の基盤になっているという見解については、この文章ではそれ以上の説明はなされていない。あるいはコクトーは十分間という放送時間の制限もあって詳細な言及を控えたのかもしれない。しかし、日本人の微笑の根底には「自殺、すなわち集団を要約する天皇のために個人が捧げる犠牲の力」があり、それは「浮世絵の花々が地中に暗く曲がりくねった根をしずめている」のと同じなのだ⁸⁾という、旅行記中のむしろ批判的な一節を読むとき、私たちはコクトーがそれについてラジオで多くを語らなかった理由を想像することができるのではないだろうか。

話を放送原稿に戻せば、終わりの二つの段落（「皆様方…ことと思ひます」）はその夜の「挨拶」を締めくくるとともに最後に朗読する詩を紹介するためのものであり、重要な内容を含むものではない。また、その晩コクトーが朗読した詩を聞いた多くの人たちが抱いた様々な感想については、別の稿で論じたとおりである。⁹⁾

なお本稿で紹介した訳文のもとになったコクトーの直筆原稿は、現在堀口家で保管されていることが確認されている。現時点では公にされていないそのフランス語原稿もいつか検証の対象となる日が来るに違いない。

2 「ペン・クラブに於ける挨拶」

東京に到着した最初の日、コクトーは明治神宮を訪れ、歌舞伎を観劇した。

翌5月19日の午後、堀口大學や旧知の画家・藤田嗣治（1886-1968）と連れ立って相撲を観戦した詩人は、その夜には彼らとともに新聞社の座談会に出席している。

ホテルの部屋にいても絶え間なく客が訪れ、コクトーはほとんど休む間もなかったというが、それでも詩人は続く20日の昼に軍事博物館「遊就館」を訪問し、夜にはペンクラブの例会に招かれてスピーチを行なっている。雑誌『セルパン』はペンクラブにおけるこのスピーチの内容も掲載しているが、ラジオ番組とは違ってその場に居合わせた者しか聴くことのできなかつたコクトーの「挨拶」について詳しく紹介しているのも、おそらくこの特集記事のみであろう。

ペン・クラブに於ける挨拶

ジャン・コクトー

淑女並びに紳士諸君、

今夕、かやうな席上に招かれて、お話を申し上げることは非常に憶病に感じてゐます。

私は今まで一度もかうした^{オフシエール}公式の席上で演説をしたことがありません。これが私の一生を通じての、最初の公式の席上での挨拶なのであります。

私はパリでは、どんな文学的な団体にも参加してゐませんし、まして、公式の^{ミリユ}環境や会合に出たこともありません。

私が見た日本は、いままで版画や屏風などを通して知つてゐた日本とは、正反対の日本でした。

人々はいままで花とか、鳥とかいふ風のイメージによつて、日本を伝えてゐました。しかし、私の見た日本は、非常に^{セリユ}真摯で、^{グループ}莊重で、力強い日本でありました。これは街路を歩いて、劇場に行つても、また相撲を見ても、いつの場合にも日本特有の大きな力として、感じられるところです。

私は先日、明治神宮に参拝しましたが、そこに象徴されてゐる日本の愛国的な、国民的な精神が、いかなる日常的な光景のなかにも、存在してゐるのを感じました。

日本は非常に宗教的な感情を多く持つた国であると思ひます。これは^{クレリカル}僧侶的といふ意味ではなく、^{リチユエール}儀式的ともいふべきものなのであります。

最後に一言申し上げます。私が日本に来て、最初に、最も強く心を搏たれたことは、神戸の町で少女が道で遊んでゐて、右けりをしてゐるのを見ました。その少女は舌を出して、白墨を手にして地面に^{セルクル}円形を描いてゐました。その円形が実に立派な、正確なものであつたことです。

^{ちい}幼きな少女でさへも、これだけの正確な、幾何学的な線を描く国は、恐らく、日本を措いて外にありません。北斎は、彼のサインの下に円を描いてゐますが、いまお話しした少女のささやかな例の中にも、日本の国民性のなかにある芸術性と、心の幾何学とを感じたことを、つつましやかに申しあげる次第です。 (小松 清訳) 10)

『セルパン』編集長の春山によればペンクラブにおけるこの「挨拶」には通訳がつかなかったため、上の文章は当日、別室で小松清に口述してもらった内容を春山自身が書きとめたものであるという。したがってこの文章はコクトーの言葉を正確に記録したものというより、あるいはスピーチの概要を示してくれる程度のものであるべきかもしれない。

それはともかくとして、コクトーによるこの「挨拶」は大きく三つの部分に分けることができる。まず最初の四段落（「淑女並びに…出たこともありません」）は、公式の席でこうしたスピーチを行なうのは初めてであるという不安をコクトーが語った、いわば全体の導入部である。

次の四つの段落（「私が見た…なのであります」）はこの「演説」の中心となるべき部分だが、その中には前章で取り上げたラジオ用の朗読原稿と重なる表現も多く見受けられる。例えばこの

スピーチには、訪れる前に抱いていた印象とは違って日本は「非常に^{ケリユ}真摯で、^{グループ}荘重で、力強い」国であったという一節がある。一方のラジオ番組においてもコクトーは、日本は「厳粛」で「宗教的な」姿を持っていると語っていたが、スピーチの中で小松が「荘重」と訳したフランス語「grave」は、実は堀口がラジオ原稿において「厳粛」と訳出したのと同じ形容詞なのであった。

またコクトーがラジオ原稿の中で綴った、日本は「宗教的」な姿をしているという表現についても、「宗教的」という言葉がどのような意味で用いられたのかは上のスピーチの内容を考えあわせれば自ずと明らかになる。ペンクラブにおいてコクトーは、日本は「宗教的な感情を多く持った国」であるが、それは「僧侶的といふ意味ではなく、^{クレリカル}儀式的とでもいふべき」だからであると語った。フランス語の「clérical」は「^{リチュエル}聖職者の」という意味も有するが、むしろ「教会の権威を支持する」という意味で用いられる場合が多い。そうした意味を踏まえるなら、コクトーが日本を「宗教的」と呼んだのは「この国の人々が僧侶のごとく宗教（の権威）を絶対的に信仰している」からではなく、「日本という国が宗教の儀式に通ずる厳かな形式性と張りつめた空気とに満ちている」からだと解釈することができるだろう。

コクトーはまたペンクラブのスピーチの中で、「日本の愛国的な、国民的な精神が、いかなる日常的な光景のなかにも、存在してゐる」と述べている。そして、この一節もやはりラジオ放送における「上御一人の為に、尊い一命を快く犠牲にし得るあの生命の放棄」こそが日本人の根底に潜んでいるのだ、という発言と呼応しているのは明らかだろう。

こうして、「宗教的」という言葉に要約される自身の日本観について簡潔に語り終えたコクトーは、最後の二つの段落（「最後に…次第です」）をこのスピーチの締めくくりに充てている。その中で詩人は、神戸の街で目撃した石蹴りの少女の「円」を絶賛してい



【図版3】 ペンクラブに
おけるコクトー

るが、その称賛が偽りのないものであったことは、ある席で日本で最も感動したものを問われたコクトーが「堪りかねたように急に食卓を^[はな]放れて、大食堂の真ん中で円を描く少女の動作を真似」11)てみせたという逸話からもうかがうことができるだろう。

ペンクラブでのスピーチをどうにか終えたコクトーは作家の林芙美子（1903-51）らとの歓談を楽しんだ後、JOAK（現NHK東京放送局）からの迎えの車に乗り込んで愛宕山のスタジオに向かった。掲載の順序が逆になったが、前章で紹介したラジオ原稿はこのペンクラブの例会を離れた後に読まれたものであった。

十分間の生放送を終えた詩人は、今度は藤田嗣治と合流して夜の浅草や吉原の散策に出たと思われるが、その詳細については前に詳しく論じたとおりである。12)

3 「日本美術とコクトー」

『セルバン』七月号の「コクトー日本訪問」特集には、これまでに紹介したコクトーの二つの「挨拶」の他にも何編かの記事が掲載されている。堀口大學の「コクトー口気」や林芙美子の「コクトーに会ふ」、春山行夫の「ジャン・コクトーイズム」に加えて、「日本美術とコクトー」と題する一文を寄稿したのは堀口とともに東京での案内役を務めた藤田嗣治であった。この藤田の文章はそれほど長いものではないが、旧知の詩人と画家とが東京の街で交わしたいくつかの興味深い会話を紹介するものとなっている。

「例へばスペイン国は、同じ歌と踊りをいつまでも繰り返かへ[し]て、決して外の力を入れぬ故に、因襲的に存在するだけで、外へ一步も出られぬ」とコクトーは歩きながら話をする。

「日本は欧米の文明を模倣する。然し長年の伝統のお蔭で決して単なるイミテーションに終らず、更に新らしく編み出して居る。日本は真剣に真面目だから、強くなるばかりだ」と続ける。13)

ここでコクトーが強調しているのは、日本の発展は「伝統」と「模倣」という二つの力によって支えられたものであるという点である。他方、「伝統」のみを守り続けてきたスペインはそれゆえに一步も踏み出すことができないと詩人は語っているが、一般には軽蔑されがちな「欧米の模倣」をも（あるいは若干の皮肉を含んでいたとしても）否定しないところが、アメリカの近代的な機能美を愛し、映画やラジオ、レコードなどの新しい技術を積極的に作品世界に取り込んでいったコクトーらしい発言である。またコクトーは藤田にむかって次のようにも述べている。

「日本は素晴らしい伝統を持った国で、更に発展する国である。日本の女を蝶々に譬へ

るが、実はまだ繭を出かかると蛾が至当である。決して飛び廻つては居らぬ」等と話はさらに尽きぬ。14)

上の文中でコクトーは再び「伝統」の力を強調するとともに、一層の発展を目指そうとする日本のあり方についても触れている。コクトーはまた「日本の女」は「蝶」というより「繭を出かかると蛾が至当である。決して飛び廻つては居らぬ」とも述べているが、こうした発言は「日本の女」についてのみならず、「日本」という国そのものに向けられたものとも考えることができるだろう。すなわち日本は、自分では蝶のごとく飛翔していると信じているが、実際にはまだ繭を出かかると蛾にすぎないというのである。

同じく日本の女性に触れて、詩人は次のようにも語っている。

昨夜遊んだ新橋のメゾン・ド・テ、お茶屋にしてもさうだ。何処の国に料理屋にあれだけの幽雅さの雰囲気を持つ家があらう。活花はなんと云ふ芸術品であらう。各自の正確な場所に安置されて、指一本触れる余地のない伝統の精練さ。なんと云ふ素晴らしい天井柱の木材、廊下、縁側、畳に夏の籐の（ごよ）蔭、芸者、話に聞いたと断然異つた最も理想的の女性、パリに十人も連れて来たら、半年も経たぬうちに財産ができる、と女将にすすめて居る。日本娘として頭に描いた通りの純朴の生娘、手に触れ得ぬ女、藤田、お前は幸福な国に生れたよ、と先手を打たれて、私も続きが出ぬ。15)

コクトーは京都で見た芸子たちの「鴨川をどり」をほとんど評価せず、菊五郎の演じた「鏡獅子」の女形を逆に絶賛したが、東京で出会った女たちについてはむしろ高い評価を与えている。ただし日程に追われたコクトーが実際に接することのできたのは主として芸者たちであり、その中でも特に中村喜春（きはる）（1913-2004）は詩人に鮮烈な印象を与えた一人であった。そうした経験に基づいてコクトーは日本の女性、ことに芸者たちに対して上のような感想を述べたのである。

コクトーはまた同じ文中で、芸者だけでなく彼女たちを飾る生け花や建物についても伝統に裏付けられた芸術であると称賛している。そして詩人はさらに続ける。

日本美術、余白を生かす利口な、而して正しい方法の画も、家も、女も、すべてが日本美術だ。

庭の鯉までが背に余白を残して居る。私は日本に来て幸福な日を送つた。16)

東京滞在中のコクトーは藤田に案内されて、若い洋画家たちや南画の展覧会場を訪れている。訪日以前にも浮世絵や屏風などを通して日本の美術に接したことがあったと詩人は述べているが、鯉の背中の模様を日本画の「余白」と結びつけて語るあたりは、いかにも斬新な着想の詩を得意としたコクトーらしい発言である。

コクトーが藤田と交わした会話は、もちろんこの文章に記されたものがすべてではないだろう。しかし少なくともこれらの文章は、西の詩人と東の画家との親しい間柄を読む者に感じさせるものとなっている。そしてそんな東の画家は、次のような惜別の言葉とともに西の詩人に与えたこの一文を締めくくることになるのだった。

私〔藤田〕は全く彼の滞在が余りに短い為めに、より多く日本を味はさせ得なかつたことを残念に思つて、口惜しいことであつた。アメリカに着いて、さぞかし詩人コクトオは日本を更に懐しがることであらう。17)

藤田がこの文章を記したのは昭和 11 年 5 月のことであつた。しかしその時の藤田は自身自身の運命がその後どのような形で再びコクトーと結びつくことになるのかを、はたして予測していただろうか。太平洋戦争の勃発後、軍に徴用されて戦争画の制作にあつた藤田はそのことで終戦後に強い批判を浴び、結局日本を離れてフランスに移住することになった。渡仏後、初めて開かれた藤田の個展にも顔を見せたコクトーと、その後フランスに帰化した画家との交流は詩人の死に至るまで続き、『海龍 Le Dragon des Mers』(1955)『四十雀 La Mésangère』(1963) という二冊の詩画集が共同で出版されている。

4 「テープの束」

『セルパン』の記事に引きずられて前後してしまった時間を元に戻そう。

ペンクラブの例会でスピーチを行ない、ラジオで歌舞伎の印象を語ったコクトーはおそらく翌 21 日に、上野の日本南画院展と銀座の表現展を藤田や堀口の案内で訪れている。これらの展覧会について詩人は旅行記の中で「一方はこの帝国の基盤であり、もう一方は先端である」18)と述べているが、伝統的な南画にも二十世紀の洋画にもコクトーは等しく敬意を払い、気に入った作品には藤田の解説を求め、また自身の印象を詳細に語ったという。

こうして一週間の滞在日程をすべて終えたコクトーは翌 5 月 22 日、横浜の港からアメリカに向けて旅立つことになった。詩人が乗り込んだプレジデント・クーリッジ号の出帆の様様については翌日の「都新聞」が次のように伝えている。

テープの束 コクトオとチャツプリン帰る

パリソワル氏〔紙〕と八十日間世界一周を賭けてすでに六十日を経過した廿二日午後六時、横浜出帆の P・クーリツヂ号でヂヤン・コクトオは秘書のキール君と一緒にアメリカに向けてとうとう去つた、堀口大學、小松清、春山行夫、福田清人のフランス派諸氏がクーリツヂ号の A デツキ迄コクトオを見送る、コクトオは疲れた面持なんか少しもない、血色のいゝ頬は青春のやうに輝いて、サイン攻めに逢ひながら「私の心は決して疲

れない」とクルクルと自画像をデッサンした

東京では何があなたの心を衝いたか、木か街か人かキモノか芝居か
質問の答へは意外にも

群衆の力強さ、日本の力強いエスプリは群衆の中に生きてゐる、それはあらゆる時と
場合に—— 19)

春山行夫によれば当日、銀座で偶然に顔を合わせた春山と小松、福田清人（1904-95。『セルパン』初代編集長、のち児童文学作家）、それに詩人の近藤東（1904-88）らはコクトーの見送りを思い立ち、夕刻になってから横浜への道を急いだのだという。船上で会ったコクトーは記者やカメラマンだけでなく一般の乗客にも取り巻かれ、近づくのさえ容易でなかったらしいが、そんな中でも詩人はデッサンの求めに次々と応じながら記者たちの質問に答えていたのだった。

上の記事ではコクトーは日本で最も印象に残ったものとして「群衆の力強さ」を挙げているが、この発言はおそらく歌舞伎や相撲見物の印象によるところが大きいだろう。そこでコクトーは、惜しめない歓声と拍手を役者や力士に送る一方、見せ場や仕切りの瞬間には張りつめた緊張感をもって舞台や土俵を注視する観客に大きな感銘を受けたのだった。また同時にコクトーの脳裡には、参拝する人々を包みこんだ明治神宮の厳かな静寂や、行く先々で詩人を出迎えてくれた人々の熱狂的な姿も浮かんでいたに違いない。

そしてコクトーがこんなふうに記者たちのインタビューに答えるうち、横浜港にはもう一人の「賓客」が到着するのだった。

折からあわたゞしくチャップリンがゴダード嬢と自動車で駆けつける、MGM「朝飯前の恋」の監督ウォルター・ラング氏も同行だ、出帆まであと七分と云ふ処、タラツプの下でチャーリーを捉へる

何度も歓迎を受けて有難う、東京の印象？カブキも天プラも何もかもごつちやだ 20)

秘書が日本人（高野虎市^{こうの とらいち}1885-1971。ただし高野は1934〔昭和9〕年に秘書を辞している）21)だったこともあり、チャーリー・チャップリン（1889-1977）はかなりの親日家であった。初めて来日した昭和7年には東京滞在中に五・一五事件が起き、チャップリン自身も危うく犬養毅首相の暗殺事件に巻き込まれそうになったというが、それにもかかわらず彼はその後もさらに三度にわたって日本を訪問している。昭和11年の3月に二度目の来日を果たしたチャップリンは当時の妻ポーレット・ゴダード（1910-1990）とともにふた月の間アジアを周遊した後、香港からコクトーと同じ船に乗り込んで三度目の日本に戻って来たのだった。

日本滞在中のチャップリンはコクトーと同じく京都で「鴨川をどり」を見、東京に移動してからも歌舞伎や相撲を見物したり、帝国ホテルに宿泊したりと二人の行動には共通す

る点も少なくはなかった。そうしたチャップリンの動静は今日の知名度から考えればコクトーの何倍も大きく報じられてよいはずであったが、当時の新聞紙面では両者はほぼ同じか、あるいは詩人の方がむしろ大きく扱われている場合が多い。それは昭和初期の日本ではコクトーへの注目度が高かっただけでなく、報道陣に追われることを嫌ったチャップリンが彼らにすげなく応じたのに対して、コクトーの方は記者たちの取材に真摯に対応し続けたためでもあっただろう。詩人がラジオ番組に出演した夜、放送を聞いた作家の野上彌生子(1885-1985)はその感想を日記に綴った後で、「チャップリンも愛人のゴダ嬢と〔コクトーと〕同じ船で来て、銀ブラしてゐる写真など出てゐる。いかなる賓客もしばしば訪れるものはあまり歓迎されない例を彼も示してゐる」²²⁾と記しているが、これなどは紙面でのチャップリンの扱いに関する率直な感想のひとつと言えらるだろう。

そして喜劇俳優とフランス詩人の離日を報じたこの「都新聞」の記事も、やはりコクトーへの言及によって締めくくられることになるのだった。

〔チャップリンは〕出帆ドラで泡喰つて駈け上る、コクトオはAデツキ、チャーリーはポートデツキ、米仏の芸術家は花束のやうなテープにまかれて大声をあげる

コクトオは右手を上げ「オウ・ルボアール・ヂヤポン！」鬼オコクトオの印象は船と共に同六時半すぎ太平洋上へ去つた²³⁾

こうして一週間にわたる日本滞在を終えたジャン・コクトーは昭和11年5月22日、次の目的地であるアメリカに向けて旅立っていった。前にも触れたとおり、そんな詩人を見送る人々の間には『セルパン』編集長として「コクトオ日本訪問」特集をまとめることになる春山行夫の姿があったのだが、その春山とコクトーとの関わりについては本論考の後篇において検証を行なう予定である。

注

1) 「都新聞」昭和11年5月19日付日刊。

なお本稿においては原文で正自体が用いられている場合も、固有名詞をのぞき、新字体に改めて引用を行なっている。またルビや送り仮名についても不要と思われる場合は省略する一方、必要に応じて〔 〕で補っている場合もある。

2) 同。

3) 同。

4) Cette danse, si longue et sans longueurs, valait notre voyage. Je l'eusse entrepris pour la voir. (Cocteau, J., *Tour du monde en 80 jours (mon premier voyage)*, Gallimard, 1936, p.177.)

5) 「都新聞」昭和11年5月20日付日刊。

6)堀口の代表作とも言うべき訳詩集『月下の一群』も第一書房から出版されたものであった。またコクトーの世界旅行の記録である『僕の初旅 世界一周』も、堀口の翻訳によって同書房から刊行されている。

7)『国立国会図書館所蔵 セルパン・新文化（復刻版）』第15巻、アイ アール ディー 企画、平成10年、72～73頁（昭和11年7月号「コクトー日本訪問」特集）。

8)Mais le suicide, je veux dire la faculté de sacrifice de l'individu à la masse ou bien à l'Empereur qui la résume, forme la base de tous les sourires et de tous les saluts. Les fleurs des estampes plongent dans le sol des racines tortueuses et nocturnes. (Cocteau, op.cit., p.165)

9)『共愛学園前橋国際大学論集』第8号「『盗まれた』詩集」他、参照。

10)『セルパン・新文化（復刻版）』、78～79頁。

11)小松清「旅を賭けた詩人（一）」、「読売新聞」昭和11年5月21日付日刊。

12)拙著『コクトー、1936年の日本を歩く』（中央公論新社、平成16年）他、参照。

13)『セルパン・新文化（復刻版）』、84頁。

14)同、85頁。

15)同。

16)同。

17)同。

18) A la base de l'empire et à sa pointe. (Cocteau, op.cit., p.187)

19)「都新聞」昭和11年5月23日付日刊。

20)同。

21)チャップリンと高野に関しては、大野裕之「チャップリン なぜ世界中が笑えるのか」(『NHK知るを楽しむ 私のこだわり人物伝 チャップリン／モーツァルト』所収、日本放送出版協会、平成18年)参照。

22)『野上彌生子全集』第Ⅱ期第五巻（日記五）、岩波書店、昭和62年、91～92頁。

23)「都新聞」昭和11年5月23日付日刊。

図版出典

[1]「都新聞」昭和11年5月19日付日刊。

[2]「都新聞」昭和11年5月20日付日刊。

[3]『国立国会図書館所蔵 セルパン・新文化（復刻版）』第15巻、77頁。

Abstract

Jean Cocteau's "Salutations" to Japan

Masaya NISHIKAWA

During the visit in Japan in 1936, Jean Cocteau made two official speeches. One of them was entitled “*Salut au Japon* (Salutation to Japan)” and broadcasted by radio, while the other was made at a meeting of Japan P.E.N. Club.

In my essay, I quote Japanese translations of these two speeches that I found in the magazine called “Serpent”, published one month after Cocteau's visit. Through the examination of these speeches and the articles on him, I tried to figure out Cocteau's characteristic comprehension of Japanese people, culture and society.

Accordingly my essay consists of the following chapters :

- I. Salutation to Japan
- II. Speech at the meeting of Japan P.E.N. Club
- III. Cocteau and Tsuguharu Fujita
- IV. Departure from Japan